

2022（令和04）年度 東北アジア研究センター共同研究報告書

提出 2023（令和）5年 5月 19日

代表者 佐野 勝宏

（本報告書はセンター内外への公開を原則とします）

研究題目	和文) 古代日本における東アジア文化の伝播と受容 英文) The transmission and acceptance of East Asian cultures in ancient Japan			
研究期間	2022（令和4）年度 ～ 2022（令和4）年度（1年間）			
研究領域	(C) 移民・物流・文化交流の動態			
研究組織	氏名	所属・職名	専門分野	役割
	佐野勝宏	東北アジア研究センター・教授	考古学	総括
	谷津愛奈	大学院文学研究科・博士課程前期	考古学	調査・分析
研究経費	学内資金	センター長裁量経費 [金額] 30万円		
	外部資金(科 研・民間等)	新領域創成のための挑戦研究デュオ (FRiD) (学内) (代表: 佐野勝宏)		[小計] 498万円
	合計金額	528万円		
研究の目的と本年度の成果の概要 (600-800字の間で 専門家以外にも理解 できるようまとめて ください。)	<p>古代中国の多様な文化は日本をはじめとする東アジア周辺地域に大きな影響を与えた。律令国家が誕生した日本では、中国の文物が珍重され流通するようになった。中国産の陶磁器は、太宰府経由で日本各地に流通し、当該期の人的・物的交流の歴史を復元する上で重要である。本研究では、南西諸島で出土した中国産陶磁器を研究対象とし、その幾何学的形態測定学によって形状を定量的に解析し、製品流入の実態解明を目指す。</p> <p>本年度は、南西諸島の喜界島と徳之島で出土した青磁の解析を行った。Artec Spider を使用して取得した三次元スキャンデータを Geomagic Design X を用いて処理し、統計解析言語の R と幾何学的形態測定学的分析を行うためのパッケージである Momocs を使用して楕円フーリエ解析を行った。青磁高台の楕円フーリエ解析を行った結果、そのプロットがおおよそ遺跡の編年段階ごとにまとまることわかった。対象とした喜界島の遺跡は徳之島の遺跡よりも古い時期の遺跡があるが、喜界島の遺跡から出土した青磁は第一主成分が大きく、徳之島の青磁は第一主成分が小さい領域に分布した。更に、徳之島内の遺跡でも、遺跡の編年段階に応じて分布が別れ、おおよそ識別可能であることがわかった。遺跡から出土する青磁は破片資料が多いため、それ単独で編年的に位置づけることは難しいが、今回の調査により、青磁の高台部分が残存していれば、その形態測定学的分析により、どの編年段階に帰属する可能性が高いかを検討することができることがわかった。</p>			
本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール	<p>南西諸島では、11世紀に至るまで日本列島の「中の文化」とは異なる狩猟採集生活が継続され、独自の貝塚文化が持続されてきた。ところが11世紀以降のグスク時代になると、農耕・家畜が九州から伝達され、中国産陶磁器が南西諸島の島々で出現し始める。このように、南西諸島においては、該期に人的・物的交流における画期があった。中国産陶磁器は、グスク時代以降の人的・物的交流の歴史を解明する上で重要な資料であるが、多くは破片資料であるため、詳細な島嶼間交流の歴史を復元する上で課題があった。今回の成果は、破片資料でも陶磁器高台の幾何学的形態測定学的分析によって人的・物的交流の歴史を復元することが可能であることを示し、これにより中国文化の南西諸島への波及過程や、中国からの直接的な流入の歴史をより詳細に検討することが可能となる。</p>			
研究集会・企画	研究会・国内会議・講演会など	0回	国際会議	0回
	研究組織外参加者(都合)	人	研究組織外参加者(都合)	人

研究成果	学会発表 (1) 本	論文数 (0) 本	図書 (0) 冊	
専門分野での意義	[専門分野名]	[内容] 従来、考古資料に基づく物的交流に関する研究は、遺物の全体的な形態分類に基づく定性的研究が主流であった。しかし、多様で微細な形態変異をカバーしきれない点や、破片資料では評価できない等の方法論上の限界があった。本研究で採用した幾何学的形態測定学は、対象物の輪郭を定量的に解析する事が可能であり、それを統計的に評価することができる。また、高台という陶磁器の中でも変異が大きい部位に注目したことにより、破片資料でも高台が残存していれば分析が可能である。したがって、本研究で提示した方法論は、分類手法としての利点が多い。		
学際性の有無	[有]	参加した専門分野数: [3] 分野名称[地球化学、分子生物学、多様性生物学]		
文理連携性の有無	[有]	特筆事項: 本共同研究は、学内研究プロジェクト「新領域創成のための挑戦研究デュオ (FRiD)」に採択された研究課題「1 万年間続く持続可能社会構築のための文化形成メカニズムの解明」とリンクする形で進めている。FRiD プロジェクトでは、南西諸島での狩猟採集段階と農耕段階 (南西諸島では主に古代中世以降) における、人類の生態系への影響度の変化が調査されている。そのため、地球化学、分子生物学、多様性生物学の専門家との文理融合研究がなされている。		
社会還元性の有無	[無]	[内容]		
国際連携	連携機関数: 0	連携機関名:		
国内連携	連携機関数: 4	連携機関名: 琉球大学、多賀城跡調査研究所、東北歴史博物館、伊仙町歴史民俗資料館		
学内連携	連携機関数: 3	連携機関名: 文学研究科、理学研究科、農学研究科、		
教育上の効果	参加学生・ポスドクの数: 1	参加学生・ポスドクの所属: 文学研究科		
第三者による評価・受賞・報道など	無			
研究会計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題	本年度行った調査研究により、陶磁器研究の重要な方法論的改善を行うことができた。また、南西諸島の遺跡で出土した青磁の分析により、中国と南西諸島地域との交流の歴史やその文化の広域展開のプロセスを解明する上で重要な基礎的データを蓄積することができた。これらの成果は、今後 FRiD プロジェクトの成果と総合的に考察していく。			
最終年度	該当 [有]			

本共同研究に関わる業績 (発表予定含む)

[学会発表]

谷津愛奈・佐野勝宏「古代・中世日本の周縁地域と東アジアの交流」『東北大学東北アジア研究センター2022 年度共同研究成果発表会』、仙台市: 東北大学川内キャンパス、2022 年 6 月 24 日

[雑誌論文]

[その他]

*ファイル名は KyodoRpt_年度_代表者ローマ字とする。二つある場合、代表者名の後に 1, 2 と記入する (例 KyodoRpt_2013_oka1)。